

ユーリッヒ会議プログラム委員会

(日本原子力研究所) 菊池 康之

1991年5月13-17日に、ドイツ連邦共和国ユーリッヒ研究所で開催された”科学と技術のための核データ国際会議”については、原子力学会和文誌33巻864頁の国際会議の窓欄にその内容について詳細でかつ真面目な報告がなされている。そこでここではその再録は避けて、筆者のみが参加した当会議の国際プログラム委員会の裏話を紹介しようと思う。

正式のプログラム委員会は1回のみであったが、1990年3月に英国ハーウェル研究所で開かれたNEANDC会合において、NEANDCの議長でありかつユーリッヒ会議の組織委員長であるS. Qaimの希望で、従来専門家会合に当てられる時間を流用して、非公式のプログラム委員会が開かれた。この会合で、セッションの割り振りや招待講演者および招待ポスターの候補が決められた。

正規の国際プログラム委員会は、1990年12月13-14日の予定でユーリッヒ研究所で開催された。筆者は前週にパリで開かれたNEACRP/NEANDCの核データ評価国際協力のサブグループ会合に出席してから、イタリアのボローニャのENEAを訪問し、12日の早朝ボローニャからフランクフルトへ飛び、その後陸路ケルン経由で宿泊地のアーヘンへ行く予定であった。しかし当日フランクフルト空港が大雪で閉鎖され、行き先変更で着いたのが目的地のすぐ近くのデュッセルドルフであり、おかげでゆっくりケルンの大聖堂を見学する時間が出来るといふ、思いがけない好運に恵まれた。

このプログラム委員会では、アーヘンでのホテル代から滞在中の食事まで全てユーリッヒ研究所が負担してくれた。12日夜にはアーヘンのホテルでの会食、13日の昼は研究所内での立食パーティー、13日夜はユーリッヒのレストランでの会食と至れり尽せりで、その食事も美味なフランス料理中心で、本番の会議中の食事とは雲泥の相違であった。

さてプログラム委員会の審議の内容であるが、筆者にアブストラクトが送付されてきたのは11月26日で、上述のNEA関係の会議出席のための出発まで1週間しか無かった。さらにこの週は核データ研究会のある週であり、この研究会のために中国から蔡敦九氏を招待しており、その対応でいろいろな雑用が生じた上、筆者も別件で2回も東京出張しなくてはならない等、タイミング的には最悪であった。また論文の総数は約380件であり、これら全てに目を通して、採否、口頭発表またはポスターへの振り分けをするのは時間的にとても無理であった。そこで核データセンター内で、専門に応じて分担をしてもらい、予備的な判断をしてもらった。しかしそれでも時間が足らず、核データ研究会中に一部をさぼって読んでもまだ追いつかず、成田空港への電車の中や、成田空港のロビーでの待ち時間まで使って、やっとの事で日本としての案を作成する事が出来た。

プログラム委員会では、まず会議の準備状況の報告と、招待講演および招待ポスターの諾否の現状が報告された。次いで380件の応募論文から320件に絞り込む作業とその内から口頭発表論文80件を選別する作業が始まった。プログラム委員会の出席者は、日本から筆者1名、米国からは無く、IAEAとNEAから各1名、残り8名が欧州勢であった。このような状況でどうしても欧州勢が有利になるのは避けがたい。

380件を320件に絞り込むに当たっては、同一著者の似たような発表を一つに纏める事、“科学と技術のための核データ”のスコープに合わない論文（崩壊データのセッションに特に多かった）とアブストラクトからポイントが掴めない論文を拒絶する事で、比較的公正に行われた。日本からの応募論文は47件であり、拒絶1件、結合勧告3件で極めて高い受理率であった。一方非OECD諸国からの論文の拒絶率はかなり高く、これらの国での核データの考え方がかなり違う事を実感させられた。

一方口頭発表論文80件の選定に関しては、各委員共に自国ないしは自分のグループの利益代表としての立場が鮮明化し、かなり露骨な発言がみられた。非OECD諸国からの論文に関しては、IAEA/NDSが事前に予備検討を行って、その結果をJ. J. Schmidtが推薦しており、地域分布を考慮したせいか、比較的甘く受け入れられていた。しかしソ連や東欧諸国からの口頭発表に対しては、過去の苦い例から本当に出席可能なのかについて、かなり厳しい意見も出された。米国に関しては出席委員は無かったが、手紙による具体的な推薦も有り、またそれなりの大家が多くいる事からかなりの人数になった。しかし出席委員の無い事から、競り合いになったときにはやはり不利であった事は否めない。このような状況では、筆者も日本代表としての立場を強く出さざるを得ず、かなり頑張って10件の口頭発表を獲得したが、すんなりと皆が認めたのは半分もなく、残りは強引に粘って獲得したものである。一方欧州勢の露骨さはそれ以上で、高名な某教授などは、自分のグループのものばかりを推すので、別の委員から、“プログラム委員は自分のグループに対しては遠慮気味であるべきで、そこからの口頭発表が多すぎるのは、皆の輦感を買い、きみの名譽にもならないぞ。”と注意されるほどで、まるで駄々っ子の様であった。

このような議論を朝9時から夜9時まで行い、13日一日で審議を終了した。その後、前述のユーリッヒのレストランで会食をして、ホテルには1時過ぎに戻った。翌日は自由になったので、有名なアーヘンの大聖堂を午前中に見学して、午後にはアーヘンを後にした。

今回の教訓として、国際会議のプログラム委員会は、決して学識者による大所高所からの議論ではなく、自分のグループのためのすさまじい利益合戦の場であるので、その出席は絶対に必要である事を認識した。従来日本では旅費の問題もあり、プログラム委員会への出席は極めて稀であり、これが国際会議の場において、日本の実力を過小評価される大きな原因となっていると思う。